

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



統計コンテストなどに挑戦している生徒たちと話す秋山仁さん(中央)と横澤克彦教諭(右端)＝長野県屋代高校で(2・3面へ)

巻頭特集

数学者 秋山仁さんが長野県屋代高を訪問

読売教育賞受賞者の授業に感嘆 2・3

学校×企業

城西大学×読売新聞 新聞制作システムを解説 4

留学生に英語で地域文化をガイド 国学院久我山中高 5

土曜サロンでNIE学ぶ 6 全国高校NIE研究会 全国大会 7

学校図書館への新聞配備拡充めざし、文字・活字文化推進機構が集い 7

お知らせ・短信 8 リレーエッセー ジョージタウン大学「日米の『代表』として海外で学ぶ」 9

2016.5

Vol.17

数学者・秋山仁さんが 長野県屋代高校を訪問

統計用いた問題解決の授業で 読売教育賞最優秀賞

横澤教諭



横澤教諭の授業では、秋山さんも教壇に立った

今年で65回目を迎える「読売教育賞」。学校や地域での優れた教育実践に光をあてるのが目的で、受賞を機に、一層指導に磨きをかける教員も多い。第63回(2014年度)の「算数・数学教育」部門で最優秀賞を受賞した長野県屋代高校・付属中学校の横澤克彦教諭(50)を、選考委員を務める数学者の秋山仁・東京理科大学教授が訪ねた。

「ズ」といった見方が出た。少しい間において、横澤教諭が「おなかをすかせた高校生が夕方にフランクフルトや空揚げを買う。そんな記録がカードに蓄積され、商品開発や陳列に生かされているんだよ」と話すと、生徒たちは感心したようにうなずいていた。

横澤教諭は、データを活用して問題を解決する力を育てるため、数学の授業で統計の学習に力を入れている。この日は、生活の中でデータ分析が生かされている例を紹介した。

田中健登君(15)は「統計は数字が並んでいるだけの印象だったけれど、具体的な使われ方がわかって面白かった」と興味深そうに感想を語った。

コンビニのカード精算 企業側のメリットを考える

「コンビニエンスストアで使うカードのいいところは？」。4月18日、長野県千曲市の屋代高校。1年生の教室では、横澤教諭のきびきびした声が響き渡った。

「買い物をするポイントがたまると小銭が要らない」など意見が出た後、「じゃあ企業のメリットは何？」と問いかけた。

「客を囲える」「レジがスムー

コンクールを通じ 生徒のやる気引き出す

授業を見学した秋山さんは、「統計はビッグデータなどでも活用され、未来を予測する学問になっている」としたうえで、「いい指導者がいると、いい生徒が育つことを自分の目で確認できた」と笑顔を見せた。

一昨年、横澤教諭が「読売教育賞」に応募したリポートを読んだ、秋山さんが感心したのは、生徒のやる気を引き出すための

「主権者教育」の実践報告も期待

読売教育賞は今回から、募集部門の一部を見直した。「教育カウンセリング」を「児童生徒指導」に統合し、不登校やいじめに関する指導、スクールカウンセラーらの実践なども募る。

また、「外国語教育」「学校づくり」「保健・体育の教育」の各部門は、「外国語・異文化理解」「カリキュラム・学校づくり」「健康・体力づくり」にそれぞれ名称変更した。「時代の変化に対応し、幅広い教育活動の報告を期待したい」と、選考委員会会長の谷川彰英・筑波大学名誉教授は語る。

「社会科教育」では、今年から選挙権が18歳以上に引き下げられるのを受け、特に主権者教育の実践に関する応募を歓迎している。同部門の審査を担当する谷川座長は「政治や社会の仕組みを理解し、自分で判断して投票する意識を持たせていくことが大切」と強調する。

昨年から応募期間は8月中となり、夏休みを利用してリポートをまとめる教員も多い。「地道に実践し、試行錯誤した道のりを書いてもらえばいい。子どもとしっかり向き合った教師のリポートは必ず読む人の胸を打つでしょう」と谷川座長は話している。

創意に富んだ取り組み 秋山さんが提供呼びかけ

横澤教諭は「読売教育賞の受賞を機に、自信を持ってデータ分析を取り入れた授業を進めることができた。生徒たちが学習の成果を外に発信する機会も増えた」と話す。

今年の読売教育賞募集を前に、秋山さんは「先生たちが考え、積み重ねてきたオリジナリティーあふれる授業や取り組みがたくさんあるはず。そんな宝をリポートにして全国の先生方に提供してほしい」と呼びかけている。

各種コンテストに挑戦している生徒や横澤教諭(右端)と話す秋山さん(中央)

選考委員会会長の
谷川彰英さん

応募要項

【募集部門】①国語教育 ②算数・数学教育 ③理科教育
④社会科教育 ⑤生活科・総合学習
⑥健康・体力づくり ⑦外国語・異文化理解
⑧児童生徒指導 ⑨カリキュラム・学校づくり
⑩地域社会教育活動 ⑪特別支援教育
⑫音楽教育

【対象】小中高校、特別支援学校、幼稚園、保育所、児童館などの教職員、スクールカウンセラー、PTA、教育関係団体、教育委員会などの関係者

【表彰】部門別に最優秀賞(盾と副賞50万円)、優秀賞(盾)

【応募期間】2016年8月1～22日。同日消印有効

【発表】結果は10月下旬に読売新聞に掲載予定。

詳細は読売教育賞ウェブサイトに掲載

<https://info.yomiuri.co.jp/contest/edu/kyoiku.html>

問い合わせは事務局へ ☎03-6739-6713



新聞制作に使われているデジタル技術の説明を熱心に聞く学生たち。奥は清土部員

技術系社員が出前授業

城西大学

×読売新聞

新聞制作の電子システムを解説

埼玉県坂戸市の城西大学経営学部で4月25日、新聞制作に使われるデジタル技術について、読売新聞社員が出前授業を行った。

同学部でプログラミングやウェブデザインを教えている栗田るみ子教授（教育工学）が企業研究の一環として依頼。栗田教授のゼミの4年生約40人を前に、制作局技術一部の清土桂一郎部員が講師を務めた。本社の技術系社員が出前授業を行ったのは、今年3月に東京都立忍岡高校で行われた授業に次いで2回目。

記事や画像の送稿から紙面レイアウト、印刷、発送に至るまで、新聞社では様々な電子システムが構築、運用されている。清土部員は、本社の記者が実際に使っている原稿作成ソフトや写真送稿ソフトの画面を見せながら、システムの概要を説明。紙面をレイアウトする「組版システム」については、熊本地震発生時の一面記事を例に、1日に朝刊3回、夕刊3回の締め切りがあり、時間の経過と共に刻々と入ってくる情報を更新しながら、計6種類の紙面を作成していることを説明した。

タブレットで地域ニュース新しいサービスも

さらに、インターネットのポータルサイトやJRの新幹線車内の電光掲示板にニュースを配信したり、独自開発したタブレットを新聞の購読者にレンタルして、地域情報を配信したりしている、新しいデジタルサービスについても紹介した。

栗田教授は日頃からNIE（新聞活用教育）活動に力を入れており、同大の学生たちは、壁新聞を作ったり、地域の話題を取材して記事を書き、地元紙に掲載したりする授業も経験している。

メディアに関心を持つ学生も多く、今回の出前授業でも、学生同士で活発に意見を交わし合う姿が見られた。

最前列で授業を聞いていた男子学生3人組は、「ニュースは携帯サイトでチェックすることが多いが、携帯サイトのニュースも新聞社が配信していること

を、今回初めて知った」と驚いた表情。そのうちの一人、吉田捷人さん（21）は、「新聞制作の具体的な流れが分かり、参考になった。新聞もデジタルサービスを提供し、時代に合わせて変化していることを感じた」と話していた。

栗田教授は、「どんなにIT技術が発達しても、それを使って情報をやりとりするのは人間同士であることを忘れないほしい。今回、実際に新聞を制作している技術者の方の話をリアルに聞けたことは、学生たちにとってよい経験になったと思います」と振り返った。



学生同士で話し合う場面では、活発に意見を交わし合う姿が見られた

英語で地域の文化を紹介

国学院大学久我山中学高校（東京）の生徒30人が5月7日、学校周辺の寺町を7か国14人の外国人留学生とともに巡り、その魅力を英語でガイドした。世界に発信できる英語力を身につけてほしいという願いを込めた課外活動で、2020年東京五輪・パラリンピックで訪れる観光客の「おもてなし」も視野に入れている。



関東大震災で破損した妙寿寺の「割れ鐘」について説明する生徒（左端）（国学院久我山中学高校提供）

国学院久我山中高の生徒が留学生に

江戸時代の浮世絵師・喜多川歌麿が眠る世田谷区北烏山の専光寺本堂。昭和50年代に復刻された歌麿の美人画を見せながら、先代住職の三輪泰寿さん（85）が版画の作り方を詳しく解説する。食い入るように見守る留学生の傍らで、ガイド役の高校2年・南部亜紀さん（16）は脳みそに汗をかくような思いをしていた。

「事前に浮世絵は勉強したけれど、まさか版画作りの工程をここまで詳しく披露するとは。どうやって英語で説明しよう……」

浮世絵作りの工程を通訳

通訳する相手は国学院大学の交換留学生でイタリア人の学生、グロツン・アニータさん。意を決した南部さんは「江戸時代の美人の特徴は切れ長な目、高い鼻、小さな口」と英語で話しはじめた。その隣で高校2年の高尾紀佳さん（16）も「自分の言葉で伝えるしかない」と即興で木版画独特の制作工程を解説する。「Printing each piece of body parts and by adding up all these parts, total picture is

composed」
ふだんは静かな本堂に元気な英語が響き渡った。

このプログラムは、同校中学1年の国語と社会のフィールドワークとして15年前から行われてきた「地域探訪」を進化させたもの。

校舎のすぐ北には江戸の飲み水を確保するために整備された玉川上水や神田川がある。南側には関東大震災で被災した浅草や築地などの寺が移転してきた烏山寺町。こうした史跡探訪を通じて生徒たちは江戸時代の土木技術のレベルの高さに触れた

東京五輪・パラリンピック視野に

り、浮世絵がゴッホら印象派の画家に大きな影響を与えたりしたことを学んできた。

東京五輪・パラリンピックの前に外国人観光客が増え、外国語の重要性は増す一方。そこで、同校は留学生を招き、生徒が英語で地域の史跡を案内することを企画した。

昨年10月、ガイド役を募集したところ中高生54人が手を挙げ、11月から週1回の勉強会が始まった。2人のネイティブ教員と英語科・社会科の教員が加わり、英語教材も作成。自己紹介の方法、寺と神社、浮世絵な

どのテーマで学習を重ねた。

ガイドを務めた生徒たちには様々な「気づき」があった。その一つは、史跡を説明するだけでは会話が弾まないことだ。

どうしたら言葉のキャッチボールができるようになるのか。南部さんにとっての突破口は、最後に訪れた寺の池のほとりで耳にした留学生同士のおしゃべりにあった。

タルタルーガが突破口

タルタルーガという不思議な言葉が聞こえたので、思いきって意味を尋ねたところ、それはイタリア語の亀（tortuga）。「たまたま池に亀がいたんですね。でも、この質問をきっかけにイタリアについて教えてくれるようになり、打ち解けて話せるようになった。相手の文化を知ろうと努力して、初めて心の距離が縮まったと感じました」と振り返る。

同校女子部の高橋秀明教諭は「悪戦苦闘する場面もあったが、国際理解を深めたいという思いは通じていた。2020年の『おもてなし』も考えたい」と話す。グロツンさんも「みんなの一生懸命な思いが伝わってきて嬉しかった。情熱があればコミュニケーションは取れる」とエールを送っていた。

記者の体験談に耳傾ける NIE土曜サロン 本社で開催

読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局は4月23日、小中高校の先生とともに教室での新聞活用（NIE）について学び合う勉強会「NIE土曜サロン」を本社内で開き、都内や茨城、群馬、静岡県などの小中高校教諭ら約20人が参加した。

土曜サロンは「NIEに取り組む仲間が学校の忙しさから解放され、お茶を飲みながら充電できた」と、元中学校教員の鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナーが発案し、読売新聞東京本社で2008年からほぼ毎月1回開かれている。

記者が最近の取材体験談を披露する「記者のよもやま話」のコーナーには、本社生活部の吉田尚大記者が登場。吉田記者は、本紙が4月6日の朝刊1面で報じた「保育所申込者 定員超6割 74自治体本紙調査」などの待機児童問題の取材に携わった。

「学校側もどんどん発信を」

吉田記者は、「インターネット上の匿名ブログ『保育園落ちた日本死ね』は言葉が汚いなどと批判されているが、書いた母親は『保育士の待遇をよくすることなら協力したい』とメールに記すような人で、非常識な人



「記者のよもやま話」のコーナーで参院選取材の裏話を紹介する政治部の海谷道隆記者（右奥）



ワンポイントレッスンのコーナーで授業での新聞活用についてアドバイスする鹿野川喜代美・本社NIE企画デザイナー

「考えさせる問いかけを」

5月28日に開かれた土曜サロンの「記者のよもやま話」コーナーでは、政治部の海谷道隆記者が、夏の参院選をめぐる報じられた同日選に関する取材活動の裏話を披露した。

また、ワンポイントレッスンのコーナーでは、鹿野川NIE企画デザイナーが、前日のオバマ米大統領の広島訪問を伝える号外を全員に配り、「教室に貼って、『写っている人が何を話しているのかセリフを考えよう』という簡単な質問でもいいので、問いかけてみるといいです。子どもは成長段階に応じて、何かを感じてと思う」と助言した。続いて当日の朝刊を全員で読み、授業で活用できる記事についてグループごとに意見を出し合った。

ではない」などと取材の裏話を明かした。また、自身の取材体験を基に、「ともすれば学校で起きた事件ばかりが報道され、それがインターネット上を漂うことになってしまふ。ぜひ学校で行っている『良いこと』が報道されるよう、皆さんの側から

もどんどん情報発信してほしい」と呼びかけた。

鹿野川NIE企画デザイナーによるワンポイントレッスンのコーナーでは、小中学校で18年度以降に「特別の教科」となる「道徳」について、参加者が当日の新聞から授業の素材となる記事を探し、授業方法についてアイデアを出し合った。

次回は6月25日（土）14：00～
参加申し込みは教育ネットワーク事務局
「NIE土曜サロン係」 nie7717@yomiuri.com



文字・活字文化
推進機構が
国会内で集い

公益財団法人「文字・活字文化推進機構」（肥田美代子理事長）は4月21日、小中高校図書館に複数の新聞を配備することなどを求める集いを国会内で開いた。教育・出版関係者ら約200人が参加し、国の概算要求に向けて学校図書館に関する予算の充実を求めていく方針を再確認した。

学校図書館への新聞配備を含めた予算は、「学校図書館図書整備5か年計画」に定められている。2016年度までの4次

計画では、全国の小中学校約3万2000校に新聞1紙ずつを配備する予算として、単年度で15億円、5年間で計75億円が盛り込まれた。

配備率3分の1にとどまる

しかし、同計画は使途の限定されない地方財政措置のため、実際の配備状況は14年現在で小学校36・7%、中学校31・7%にとどまっている。このため、教育・出版関係者からは、17年度を初年度とする5次計画で、さらに予算を充実させ、「新聞のない家庭の子どもも、せめて学校図書館に行けば新聞が読める」（肥田氏）環境を整えるよう求める声が上がっている。こうした声に応じ、超党派の学校図書館議員連盟（会長・河村建夫元文部科学相）は、文字・活字文化推進機構の集いに先立つ19日、馳浩文部科学相と省内で会談し、5次計画では小中高校に複数の新聞を配備することなどを要望した。河村氏らは、今夏の参院選で「18歳選挙

「小中高校図書館に複数の新聞配備を」

権」が適用される見通し

であることも念頭に、「学校に行けば新聞が読める」環境づくりを求めた。会談で馳氏は、「中学、高校ぐらいから複数紙読み比べる意識があってもいい」と応じた。同議員連盟は、21日の集いでも共催に名を連ねている。

馳文科相 体制整備を表明

馳氏も21日の集いに顔を見せ、「学校図書館の充実のためにも、皆さん方の力もいただきたい

て、できるかぎり体制を整備していきたい」と表明した。

集いでは、作家の阿刀田高・同機構副会長が講演を行った。阿刀田氏は「日本の識字率の高さが世界一であることは、国民の大変な財産だ。そういうものを培うものとして新聞があり、本がある。それを学校教育の中で一番積極的に活用していくべき図書館の役割は非常に大きい」と述べ、5次計画の充実を強く求めた。

全国高校NIE研究会の全国大会

「多様化するメディア」テーマに開催

全国高等学校NIE研究会（坂口泰通会長）の第14回全国大会が3月28、29の両日、東京都千代田区の明治大学駿河台校舎で開かれ、NIEに取り組む全国の高校教師らが参加した。

今年度は「多様化する情報メディアとNIE」がテーマ。「主権者教育」の重要性が改めて叫ばれる中、これまでの紙媒体の新聞活用のみではなく、様々なメディアからの情報収集のあり方を生徒の視点で考えるのが狙いだ。

初日は、ヤフー株式会社メディアカンパニーニュース事業本

部編集リーダーの伊藤儀雄氏や、読売新聞東京本社メディア局専門委員の松井正氏ら、新しいメディアに精通した実務者らによる講演やパネルディスカッションが行われ、参加者らは高校生のメディアリテラシーのあり方など授業に生かすヒントを学んだ。

二日目は、明治大学付属明治高校教諭の小岩孝一氏によるNIE授業の実践報告や、明治大学特任教授の藤井剛氏による講演「教員志望学生とメディア」などが行われ、参加者らは熱心に耳を傾けていた。

News

2016年度「新聞検定」 9月24日開催

読売新聞は、学研グループ・市進教育グループと協力し、児童生徒の学力向上を目的とした「新聞検定」を昨年に引き続き、首都圏1都4県で開催します。用意された特定の日の読売新聞を読みながら、様々な問題を解く新しいスタイルの検定です。

今の中学2年生が大学を受験する2020年度には、現在のようなセンター試験の解答形式は廃止になり、知識偏重型から自分で考えて解答する方式に変わる予定です。そのためには日頃から新聞を読んで、「新聞を読み解く力」を身に付けることが重要になってきます。

新聞から正解を導くことを通して、情報を正しく読み解く力、視野を広げてものを見る力、自分の考えを正しく伝える力を「新聞検定」で試してみませんか。

申し込みは新聞検定のウェブサイトから。申し込み締め切りは8月20日(土)です。

→ <http://www.shimbun-kentei.com/>

問い合わせは、新聞検定事務局(03・6739・6956、平日10～17時)へ。



【実施日時】9月24日(土)11:00～11:50

【会場】東京、神奈川、千葉、埼玉、茨城各都県の学研グループ、市進教育グループの各塾など。ウェブサイトから希望の会場を選択できます(親子でも受検できます) 【検定料】無料

【部門】「初級」(小学校高学年向け)と、「中級」(中学生以上向け)

【参加記念品】①「読売KODOMO新聞」または「読売中高生新聞」のどちらか 1号分(すでにご購読の方には、読売新聞オリジナルノート)

②「新聞検定」クリアファイル 【主催】読売新聞東京本社 【共催】学研グループ・市進教育グループ

第3回 高校新聞部 インターハイ新聞コンクール

このコンクールは、インターハイ(2016年度版)に向けて、全国の高校新聞部員が、読売新聞社主催の「インターハイ新聞コンクール」に参加し、読売新聞社から表彰される。また、読売新聞社から表彰される。また、読売新聞社から表彰される。

※応募資格：インターハイ(2016年度版)に参加する高校新聞部員

※応募期間：2016年7月1日～2016年8月31日

※応募方法：読売新聞社から応募用紙をダウンロードし、応募用紙に記入し、読売新聞社へ送付する。

※応募料：7,800円(税込)

※入賞作品：読売新聞社から表彰される。また、読売新聞社から表彰される。

※お問い合わせ：読売新聞東京本社 読売新聞社 読売新聞社 読売新聞社

第3回 高校新聞部 インターハイ新聞コンクール

エントリー受付中

全国高校総体(インターハイ)や予選などで活躍した仲間たちを取り上げた学校新聞を顕彰する「第3回学校新聞部インターハイ新聞コンクール」(読売新聞社主催)のエントリーを受け付けています。

自校の選手たちがインターハイの予選や本選に向けて練習を重ねる様子や、試合での活躍などを取材し、記事を掲載した学校新聞が対象です。優秀作品は表彰し、読売新聞紙面や「読売教育ネットワーク」のウェブサイト(<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/>)に掲載されます。

また、最優秀賞の学校新聞部には、読売新聞社などが主催する「ヴェルサイユ宮殿(監修)マリー・アントワネット展」(東京・森アーツセンターギャラリー、2016年10月25日～17年2月26日)を取材する機会が与えられます。

エントリーは7月8日まで。新聞提出の期限は9月9日です。

参加申込書の請求や問い合わせは、読売新聞東京本社・教育ネットワーク事務局内のコンクール係へ。 ☎03・3217・1967 メール: academy@yomiuri.com

第66回 全国小・中学校作文コンクール

作品募集

国内の小・中学校と海外の日本人学校の児童生徒を対象に、全国小・中学校作文コンクール(読売新聞社主催)の作品を募集します。詳しくはウェブサイトへ

→ <https://info.yomiuri.co.jp/contest/edu/sakubun.html>

【部門】小学校低学年／同高学年／中学校

【賞】文部科学大臣賞ほか。発表は11月下旬、読売新聞紙上で。

【応募規定】400字詰め原稿用紙に自筆で書いてください。テーマは自由、枚数制限はありません。入賞作品の著作権は主催者に帰属します。作品は返却しません。

【応募先】読売新聞本社 総支局

【締め切り】9月14日(水) 必着

【問い合わせ】読売新聞東京本社

事業開発部 ☎03・3216・8606

第66回 全国小・中学校 作文コンクール

自由な発想で書いてみよう!

※応募資格：小学校低学年の部・小学校高学年の部・中学校の部

※応募期間：2016年7月1日～2016年8月31日

※応募方法：読売新聞社から応募用紙をダウンロードし、応募用紙に記入し、読売新聞社へ送付する。

※応募料：7,800円(税込)

※入賞作品：読売新聞社から表彰される。また、読売新聞社から表彰される。

※お問い合わせ：読売新聞東京本社 読売新聞社 読売新聞社 読売新聞社

第3回「母への手紙・父への手紙」作文コンクール

作品募集

秋田県三種町の「橋本五郎文庫」運営委員会が、第3回「母への手紙・父への手紙」作文コンクールの作品を募集しています。橋本五郎文庫は、読売新聞東京本社の橋本五郎特別編集委員が蔵書を町に寄贈したのをきっかけに、廃校になった小学校校舎を活用して地域住民が2011年に開設した図書館です。今回は、手紙を送る対象を実の父母に限らず、親代わりの恩人など「父母のような存在」にも広がります。

800字以内で1人2編まで。住所、氏名(ペンネーム可)、年齢、性別、職業、電話番号を明記し、9月15日(当日消印有効)までにお送りください。

【応募先】橋本五郎文庫

郵 送: 〒018・2103 秋田県三種町鯉川字片平34

メール: mitanegoro@sweet.ocn.ne.jp

【問い合わせ】同文庫 ☎0185・87・3177



香港のビクトリアパークで友人とくつろぐ清水優紀さん(左)=本人提供

海外で学ぶ・リレーエッセー ⑪ 米ジョージタウン大学 「日米の『代表』として海外で学ぶ」

白百合学園高校（東京都千代田区）卒、米ジョージタウン大学3年

清水 優紀さん



日本で15年間、幼稚園から高校まで女子だけの学校生活を終了した後、4年間の大学生活を終了した後、米ジョージタウン大学、香港中文大学、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの4つの大学で過ごすことになると思っても見なかった。私の通うジョージタウン大では、3年次に海外の大学で最大2学期間過ごすことが認められるので、その機会を利用して、香港とロンドン——元植民地と元宗主国で過ごしてみようと思った。それぞれの大学では主に経済学を履修したが、力点は若干違うところに置いた。慶応では入門編

を、ジョージタウンでは経済学専攻、数学副専攻として数理経済学を、ビジネスと金融関連は香港で、経済理論はロンドンで履修した。歴史的、学問的関心に加えて、米国からの学生としてアジアとヨーロッパを体験したかったのだ。

東京育ちの私にとって、世界で最大かつ最も活気のある都市のひとつ、香港の生活に慣れるのはそれほど苦にならなかった。だが、それがコミュニケーションの問題になると、地元の人との言語の違いや文化的な壁を認識せざるを得なかった。それは、多様性に富むアメリカではついぞなかったことだった。現地の言葉が自分の話せる言語ではない場所です生活したのは初めてのこと。教育制度のおかげで、多くの香港人は英語を話せるが、それでも中心部を離れると、英語だけでは理解してもらえない。こうした苦労はあったものの、外国人としてアジアに身を置き、新しい文化や大学の雰囲気に対応しようとした体験は、本当にすばらしく、いい意味で挑戦的だった。また、世界中から集まる学生たちから学んだことも多かった。オフの時間に、今起きている難民問題や北欧諸国の模範的税制度について話し合うことも珍しくはない。

ジョージタウン大学

1789年創立の米国で最も古いカトリック、イエズス会系の大学。首都ワシントンにあり、130か国から集まった学生、教授らが勉学、研究、指導に当たっている。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

英語の原文は<http://the-japan-news.com/news/article/0002546372>でお読みいただけます。

私にとって、複数の国で学んだ経験のおかげで、ジョージタウン大入学時以上に、考えや価値観が多様化し、世界観が広がった。もちろん、日本以外の大学で学べば、計り知れないほど学びの機会が得られるのは確かだ。しかし、日米両国の代表として海外の大学で学べば、さらに目を見開かされるような出来事に出会うことがあり、それは通っている大学だけでは決して得られないものなのだ。
(会報編集部抄訳 The Japan News 2015年12月4日)